

『第二章』について 二

昭和五十六年六月十三日

盛岡市 中央公民館

一、水火の中間に一つの白道あり

「二河白道の譬喩」、これは善導大師の書かれたものです。『教行信証』の「信の巻」に親鸞聖人はその全文を引いておられます。それが『歎異抄』第二章の前提になっている。「二河百道の譬喩」を読んでみます。

また一切往生人等にまうさく、いまさらに行者のために一つの譬喩を説きて、信心を守護して、

我々の信心というものは、何らかの意味で身体に本来確かに持っているのです。けれども、あるいは持たさ  
れているのでしようけれども、世間の風でしよっちゅう  
それが荒らされて、吹っ飛んだり、何かに覆われて隠れ  
てしまつて、身体にないものようになってしまふ。そ  
れを外から守つてやろう。何に対して守るかというと、

もつて、外邪異見の難を防がん。

外からいろいろな横さまな異端邪説が入つて来て我々の本来の信心を掻き乱し惑わすものが多い。それを防いでやろう。そのため一つの譬喩を書く。

何者かこれなる。たとへば、人ありて西に向かうて行かんと欲するに、百千の里ならん。忽然として中路に二つの河有るを見る。一つにはこれ火の河、南にあり。二つにはこれ水の河、北にあり。二河おのおの闊（ひろ）さ百歩、おのおの深くして底なく、南北辺なし。まさしく水火の中間に、一つの白道あり、闊さ四五寸ばかりなるべし。この道、東岸より西岸に至るに、また長さ百歩、その水の波浪交はり過ぎて道を湿おし。その火焰また来りて道を焼く。水火あひ交はりて、常にして休息なし。この人すでに空曠のはるかなる処に至るに、さらに人物なし。

誰もおらない。これは譬喩で言っているのですね。我々東北人は上野の駅に行つてはじめて、えらい人がいるものだなあとたまげるのですが、あの上野の駅の混雑の中でも、その人の心の立場によつては、一人砂漠の中に立

っていると同じような気持ちになる。必ずしもこの前のような、シルクロードの砂漠の中に立たなくてもいい。

ところが出て来るものは何であるかというところ、

多く群賊悪獣ありて、この人の単独なるを見て、競ひ来りて殺さんと欲す。

単独というのは文字どおり一人には違いなないけれども、つまりこの人はまったく孤独だという意味なのでしょうね。真の友達がない。一緒に助け合おうと言うような人がそばにおらない。まったく孤独なのである。だからそれを見て、競って殺そうとする。

この人死を怖れてただちに走りて西に向かふに、忽然としてこの大河を見る。

西に行こうと思って逃げ出したところが、その前にこの大河が出て来た、火の河と水の河が出て来た。

すなはちみづから念言すらく、この河、南北に辺畔を見ず、中間に一つの白道を見るも、きはめてこれ狭少な

り。二つの岸あひ去ること近しといへども、なにによりてか行くべき。今日定めて死せんこと疑はず。まさしく到り回らんと欲すれば、

ここで死ぬかも知れない。間違ひなく死ぬだろう、進んで行けば。それならば回れ右しよう。

群賊悪獣漸々に来り逼む。まさしく南北に避け走らんと欲すれば、悪獣毒蟲競ひ来りてわれに向ふ。まさしく西に向かひて道を尋ねて去かんと欲すれば、またおそらくはこの水火の二河に墮せんことを、と。

どっちへ行っても駄目だ。悪獣、毒蟲、群賊が両方からやって来る。と言って向こうへ行こうとすると水と火の河が両方に交わって、狭い道だから溺れるか焼け死ぬか間違ひなくやられてしまうだろう。

時にあたりて惶怖することまた言ふべからず。すなはちみづから思念すらく、

ここで最後に腹が決まる訳ですね。限界状況にぶつか

った訳である。

我いま回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。

つまり過去に返っても駄目だ。現在に留っていてもそのまま死ぬだろう。未来に進もうとしてもまた死ぬだろう。過去も現在も未来もことごとく死しかほかはない。

一種として死を勉（まぬが）れざれば、我寧（むし）ろこの道を尋ねて、前に向うて去かん。

これはもう仕様がなから、どうせ死ぬのならば前進だ。一歩前へ出る。その次の言葉が非常に力強く私は感ずるのだが。

既にこの道あり、必ず度るべし、と。

すでにこの道あり。いままで気が付かなかったけれども、なるほど白道があったのだ。これは昨日今日に出来た白道ではない。過去の永遠の昔からすでに出来上がった

ていた、ちゃんと立派な道があったのだ。道があった以上は必ず渡れるに違いない。まあ、人生十年か歩いて来て、いつまで経ってもこの道というものは、なかなかハッキリしないもので、こういう自信がなかなか出て来ない。本当に道があるということが分かったならば、もう今までの恐れはどっかへ消えてしまつて、ある以上は必ず渡れるだろう、渡れるに違いない。もうそこにはためらいも何もない。恐怖も何もない。

この念をなすとき、東岸にたちまちに人の勧る声を聞く。

いままでは全くの孤独だったのである。誰一人周囲に人がいたけれども人が見えなかった。ところが自分の腹が決まったときに忽然として人の声が聞こえて来た。しかもその人の声は自分への励ましの声である。

仁者（なんじ）ただ決定してこの道を尋ねて行け、

決定だ、腹を決めて来い。右を見たり、左を見たりするする必要はない。

かならず死の難なけん。もし住まらばすなはち死せん、と。

行けば必ず生命は無事だ。現在にグズグズしているならば、現在はそのまま死だ。東の方からそういう声があったと思つたら今度は逆にまた西の方からも

また西岸の上に人ありて、喚（よば）うていはく、なんじ一心正念にして直に來たれ、

西岸は向かい側ですな。これは西に向かつて行くのですから。東の方はとにかく「腹を決めて行け」と、西の方からは、もう少しそれを具体的に、真つすぐに一直線に目の前だけを見て、心を動かさずに來い。

われよくなんじを護らん、すべて水火の難に墮することを畏れざれと。

非常に積極的な声になっていきますな。ただ励ますだけでない。それを護ってやろうと。

初めの声は來れば必ず生命は無事だ、死の難なけんですから死なないで済むに違いない、生命は別条ない、生きられる。今度は水にも火にも当たることはないのだからそんなことを恐れるな。こういう両方の、後ろからの励ましの声、「行け。行け」というのと、前からの「さあ、來い。來い。護つてやる」というのとの両方の声が同時に聞こえ來た。

この人、既にここに遣はし、かしこに喚ばふを聞きて、すなはちみづからまさしく身心に當りて、決定して道を尋ねて直ちに進んで、疑怯退心を生ぜず。あるいは行くこと一分二分するに、東の岸の群賊等喚うていはく

そこまで進みかけたら、いままで追い掛けて來た群賊等が呼んで言わく、

仁者（なんじ）回り來たれ、この道嶮惡にして、過ぐることを得じ、かならず死せんこと疑はず、我らすべて悪心ありてあひ向かふことなし、と。

つまり、過去から呼び返すわけである。そんな危ない

処へ行くな行くななど。それはひよつとしたら死ぬだろう。いや必ず死ぬだろう、そんな処へ行けば。昨日まではとにかくお前は人生で何のかんもの言いながらも無事に来たのだから、帰りは我々も悪いことはしない。生命は無事なのだから、こっちへ返って来いこっちへ返って来いと、過去へ引き戻そうとする。

この人喚ぶ声を聞くといへども、また回顧せず、

もうしかし、決定しているのですから、腹は決まっているのですから耳に入らない。振り向かない。

一心に直ちに進んで、道を念じて行けば、須臾（しゆゆ）にすなはち西の岸に到りて、永く諸難を離れ、善友あひ見て享樂すること已むことなからんがごとし。

人生のいままでの難をすっかりそこで離れてしまつて、思いがけなく、そこに良い友達が向こうの方にはちゃんと沢山待っていてくれた。「ああ、よく来た。よく来た」とお互いに抱き合つて喜んでくれる。

これはこれ喩なり。次に喩を合せば、

そこで中身を少し砕いて言うのと、こういう譬えだと、

「東岸」と言ふは、即ちこの娑婆の火宅に喩ふるなり、「西岸」と言ふは即ち極樂宝国に喩ふるなり、「群賊悪獣いつわり親しむ」と言ふは、即ち衆生の六根、六識、六塵、五陰、四大に喩ふるなり。

我々のこの生死の身体そのものを言うのだと。

「無人空の沢」と言ふは、即ち常に悪友に随いて真の善知識に値はざるに喩ふるなり。

誰も人がないというのは、実際に人はない訳ではないのだが、沢山いるのだけれども本当の自分の助けになる人はおらんから、上野の駅の真ん中においてながら全く孤独なのだ。うっかりすると財布を盗られるかも知れない。誰かが後ろからぶつかつて来るかも知れない。そんな処はつまり誰一人人がいない処と同じだ。

常に悪友に随いて真の善知識に値はざるに喩ふるなり。「水火二河」と言ふは、即ち衆生の貪愛は水の如く、瞋憎は火の如しと喩ふるなり、「中間の白道四 五寸」と言ふは、即ち衆生の貪瞋煩惱中能く清淨願 往生の心を生ぜしむるに喩ふるなり。

我々のただ何気げなしに生きている日常生活そのものは貪瞋煩惱の以外にない。朝から晩まで貪愛瞋憎の生活なのだ。だけどそれだけかと言うと、その中にあるはその奥に清淨願往生の心が泉のように内側から湧いて来るのだと、それが白道四五寸である。

乃し貪瞋強きに由るが故に、即ち「水火の如し」と喩へ、

ただし、貪りとか瞋りの心が非常に強いから、朝から晩までそういう欲深さだけに動かされているから、まるで火と水とに責められているようなものだ。

善心微なるが故に

良い心は非常に微かであるから、

「白道の如し」と喩ふ。又「水波常に道を湿す」とは、しよっちゅう、その白い道の上に水が被って来るのだ。貪瞋愛憎の水がしよっちゅうその白道の上を侵しているのだ。

即ち愛心常に起こりて能く善心を染汚するに喩ふるなり。

この愛心はもちろん愛欲心ですね。いわゆる愛の心ではなくて愛欲心、欲の心である。

又「火焰常に道を焼く」とは即ち瞋嫌の心  
怒り好き嫌いを言う心。

能く功德の法財を焼くに喩ふるなり。人道の上に行きて直に西に向かうと言ふは、即ち諸々の行業を廻して直に西方に向かうに喩ふるなり。

一切の行を西の方に向けて、それを功德に廻して行こうとするのである。

「東岸に人の声の勧め遣わすを聞きて、道を尋ねて直に西に進む」と言ふは、即ち釈迦己に滅したまいて後の人見たてまつらざれども、なお教法ありて尋ぬべきに喩ふ、

東の方、後の方から「さあ、行け、行け」と進めてくれるということはお釈迦さんはもうすでに亡くなっているので声としては聞こえて来ないけれども、残された教えがあるからその教えが我々を励ましてくれる。

即ちこれを「声の如し」と喩ふるなり。「或は行くこと一分二分するに、群賊等喚びかえず」

ところが足を踏み出した途端に例の、いままでの娑婆でしよっちゅう縁の切れなかつた群賊などが、「そっちへ行くな、こっちへ帰って来い帰って来い」と過去へ呼び返すというのは、

と言ふは、即ち別解、別行、悪見の人等、

つまり異端邪説の人達が

みだりに「見解をもてたがいに相惑乱し、及び自ら罪を造りて退失す」と説くに喩ふるなり。「西岸の上の人ありて喚ぶ」と言ふは、すなわち弥陀の願意に喩ふるなり

過去のほうは世俗の群賊が呼ぶ。「帰って来い」という。過去のほうへ呼び戻す。ところが西岸の方は明日の方、未来の方で。未来からは弥陀がこの世ではない、あの世のほうから我々を呼んでくれるのである。

「須臾に西岸に到りて、善友相見て喜ぶ」と言ふは、すなわち衆生久しく生死に沈んで、曠劫より輪廻し、迷倒してみずから纏うて解脱するの由しなし、」

もう娑婆に纏いつかれてしまつて抜け出ることが出来なかつた。

仰いで釈迦發遣しておしえて西方に向かわしめたまふことを蒙り、

そこでどうしてこの娑婆から逃れようかと分からずに苦しんでいたところが、お釈迦さんの遺された教えが響いて来て、「さあ、西へ行くのだ、西へ行くのだ」と言われる。それからまた向かい側の方からは、

また弥陀の悲心招喚したまふによりて、

さあ、早く来い早く来いと、これは未来の方の声である。過去の方はお釈迦さんはすでに亡くなっているが教えが励まし、未来の方からは弥陀の慈悲心が声を出して呼んでくれる。

いま二尊のみ心に信順して、水火二河を顧みず、念々に遺（わす）れることなく、彼の願力の道に乗じて

もうその道は自分の歩く道ではない。仏様の慈悲心を出た白道である。その白道の上に乗って行けば、

捨命以後彼の国の生ずるを得て、

そこで生命が終わったなら、彼の国にちゃんと否応無しに着く。ちようど汽車に乗ってしまえば、そのまま上野に着いてしまうのと同じである。

仏と相見えて慶喜すること何んぞ極まらんとというに喩ふるなり。

これが有名な「二河白道の譬喩」です。ただこの前の二河白道を絵に描こうとしても、どうしてもうまく描けないのだね、どういうように描いたらいいか。これは譬えだから理論的ではないから。

だがしかし気持ちだけはよく分かりますね。我々の現実の人生体験そのものからはよく分かる、こんな感じである。どっちへ行っても危ない。どっちへ行っても助からない。とかく我々は後戻りしようとする。

角谷氏「済みません。この白道とはどういう道なのでしょう」

「白」ということの意味の説明がどっかにあったように思いましたがね。

これは我々の現実体験から言えば、現世の闇に立場にいるわけですね。後ろは過去であり前は未来である。留まらばとは現在ですから、その現実には白道と言いたいのだけれども我々の現在は闇なのだ。暗闇なのだから何も見えないわけでしょうね、混乱して。見えないのを分かったようにして歩いていくから自動車にぶつかったり、溝にはまったりやっっているわけだが。だからその暗闇に對して白という字が書いてあるのではないかな。

同じ「信の巻」のもう少し後のところに親鸞聖人の領解にこうありますね。

「百道四五寸」と言うは、「白道」とは「白」の言は黒に對するなり。

やっぱりそうでしょうね。それから「浄業」という言葉を使ってあるのですね。

「白」は即ちこれ、選択摂取の白業、往相廻向の浄業なり。

これをもし黒業と言えば悪魔の業でしょうね、白と黒との対照なのでしょう。白と同時に浄だから、やっぱり黒とは書けないのだね。この浄だから、それでやっぱり白なのでしょうね。感覚的な言葉なのでしょう。白いのが一番ものに染まっていけない。浄業だから。そこで更にそれをはっきりさせるために。

「黒」は即ちこれ、無明煩惱の黒業、

無明だから真つ暗なのでしょう。無明だから黒でしょうねこれは。それから、

二乗人天の雑善なり。

二乗人天と言うのは人間ないし人間よりちよつと上の天人たちの、要するにまあ人間とそう変わらない連中の雑業である。浄に對して雑が使っている。いろいろなものゝ雑じっているから、清らかでない。

この注釈は引用文ではなしに、親鸞聖人自身の領解です。『教行信証』は大部分はいろいろな本から引つ張って

引用して来て集めてあるのだけれども、ところどころそれに対して親鸞自身が自分の考えでこれはこうだと書いておられる。その僅かな処にちようどこれが出ていますね。

だから「白」というのは「黒」に対する。「黒」という感じはどういう感じかという、無明煩惱の明かりのない、これは黒でしょうね。煩惱は誰もちよつと白いとは言わないね。たとえばあの男は腹の黒い男だなどと言いますね。正直な人をあの男は腹黒だとは言わない。それから正直になる場合に白状しろなどと言うね。あの白はまあ白（しろ）とは違いかもしれないけれども、あれは「申す」という意味だろうか。しかし字の感じから言うと白状しろというが黒状しろなどとは言わないね。白状しろと言う。煩惱はやはり白とは言えない。腹の黒い男だと言う。それから腹が立つとカツカツとするとか、身体中火が燃えるような、ああいう譬えは、決してそれはすがすがしいとは言えない、白いとは言えない。

それから煩惱に対して、善は善だが雑善だから煩惱よりは少しは良いかのしれない。少しは良いのだけれどもそういうものはいろいろ入れ物がたくさんである。つまりこの頃の町で売っている物から言うのであればいろいろ

の混ぜ物が入っている。決して「浄」とは言えない。清らかでない。だからやつぱり黒の方である。それに対して白だと、まずこうでしょうね。

腹の黒いのに対して「白々しい嘘をつく」などということ言いますね。あれはやつぱりいかにも自分は白で、何にも黒いところはないと言いたいことなのでしょうね。

二、信樂に止まらないで欲生まで行かなければ、  
欲生我国が自力他力の区別となる

それからつぎに本願欲生心です。少し復習のようになり  
ますけれども、第十八願は「至心信樂 欲生我国 乃至  
十念」、前後の文は略してありますが、  
第十九願は「発菩提心 修諸功德 至心発願 欲生我  
国」、

それから第二十願は「聞我名号 係念我国 至心廻向  
欲生我国」。

例の三願、十八、十九、二十願の三つの願のうちどこにも「欲生我国」が出ている。「我が国に生まれんと欲す」と。

『歎異抄』の第二章の根本問題というのは、「をのをの

十余ヶ国のさかひをこえて、たづねきたらしめたまふ御  
ころろざし」、なんで水戸あたりから十余ヶ国の箱根の險  
を越えて命懸けで十人か二十人か分らないがやって来  
たのか、「ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためな  
り」、と言っているところですね。

そのところ、その言葉が本当に落ち着くと良いのだ  
が、僕らには落ち着かない。「往生極樂のみちをとひきか  
んがためなり」。最後はどこに行くかという自分の帰り  
つく家、家へ行くことを聞きたいのだと。

これはこの前にも申しましたけれども、友達なら友達  
が遠いところから来た。盛岡駅まで迎えに行つて「やあ、  
久しぶりだな、よく来たな」と。それからどうするか、  
あっちこっち盛岡中名所を案内する。それだけではどう  
も物足りないですね、我々の習慣は。やつぱりそれが一  
通り終わったならば、「まあ、陋屋だけれども家へ来てく  
れ」。・・・(テープ中斷)

あの第二章の「をのをの十余ヶ国のさかひをこえて」  
関東から京都までわざわざやって来たのは何のためだ、  
「ひとへに往生極樂のみち」、「欲生我国」を目的に来た  
のだということに気が付いてみるとですね、僕ら八十年  
かかって十余ヶ国をまだ歩き切っていない訳です。さあ

どの辺りまで来たのでしょうか、半分位まで来たのかど  
うだか。

つまりこの時の旅程は関東から京都まで一月以上もか  
かったのでしょうかね。そして親鸞聖人の処へ行って聞  
いているのだが、僕にしてみれば八十年かかってまだこ  
の途中を一生懸命歩いてる訳だ。まだ案外箱根の向こ  
うにいるのかもしれない。毎日毎日箱根の險を息絶え絶  
えに登っているのかもしれない。つまりまだ最後のとこ  
ろに落ち着かないわけである。一生かかって「往生極樂  
のみちをとひきかんがためなり」という、旅をしている  
わけである、僕自身にしてみれば、つくづくそういうこ  
とを思い知らされる。

この第二章の行き着くところは、「欲生我国」の問題な  
のである、ここで言おうとしているのは。それとこの二  
河白道のさっきの譬えとの関係。

旅をしているというだけではどうしても落ち着かない  
のです、さっき言ったように。だから友達に出会うと、  
「とにかくまあ家へ来てくれ」と言ったものですね。そ  
うすると落ち着く。どうもあれは妙な気持ちなのだ。

旅人には、旅ということの意味はどうか最後に家があ  
るといふことなのでしょうね。その家に落ち着くための

旅なのである。旅自身には意味があるのは違いなけれども、旅を本当に旅たらしめているのは何であるか、それは最後の行き着く家、家に落ち着くということなのでしよう。

とかく我々は旅自身に満足してしまつて、旅自身を人生そのものだとこつと思ひ易い。そういう立場から見ると、西行法師の生き方、芭蕉の生き方などというのは表から見ると旅ばかりである。けど本当にはそうだったのかどうか。外に表れたところは旅の生涯だけでも、ああいう人の本当の心に入つてみたいものですね。

曾我先生はこういうようにその問題を言つておられる。最初に「至心」が出てゐる。あるいは「發菩提心」も同じことである。ここにも至心廻向がある。つまり旅をしようと思を立てる。明日は一つ岩手山に登ろう、これは至心でしようね。明日は日曜だけれども、いつもならゆくり朝寝するところだけれども、いや明日は断然朝早く起きて岩手山に登ろうと「至心」である。そうして実際に登つて行く。それが「信樂」である。至心から信樂へ。それで登山ということは一応終わる。登山という形が一応それで出来る。実際に愉快である。「それでよさそうなものであるが」とこつ言つておられる。至心から信樂で、

もうそれで良さそうなものであるが、何故もう一つ「欲生」まで行かなければならないか。

宗教心が現実に生きて来て信仰を求めると。求道だ、それで良さそうなのだ。僕は信仰心を持つてゐるのだ、なにを信仰してゐるのだ、信者なのだ。うっかりすると、信者なのだといふだけで止まつてしまふ恐れがある。信者であるといふことに何か生きがいを感じてしまふ。そういう危険があるのじゃないかな。

曾我先生はそうじゃないといふのですね、そこで止まつてしまつてはならぬといふのでしようね。二河白道もその真ん中で止まつてしまつてはいけないのである。

「よし、行こう」といふまでは良いのだが、そこで止まつてしまつたのではせつかくの意味が全然成り立たなくなつてしまふ。二河白道の真ん中で止まるとうことは実際にはないのでしようが、そこで止まつてしまつて「ああ、俺は二河白道の真ん中にゐるのだ、もう安心だ」と思つてしまつたら、それはそこはそのまま娑婆になつてしまふ。そうじゃない。向う側へ来い。こちらの国へ来い。その向う側まで行つてしまわなければ本当の意味はない。どうもそういうことなのでしょうね。

信樂に止まらないで欲生まで行かなければならないと

いうところに、「自力」「他力」の問題がある。この欲生我国ということが自力他力の区別になる。

それならば、欲生とは何であるかという自力を捨てて本願に帰することである。それが欲生だという。

『歎異抄』の第一章に「悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへに」とある。「悪をもおそるべからず」とは、これを二河白道の譬えで言うのと、一直線に南無阿弥陀仏の往生道を歩けという。言葉から言うとききにのように、「西岸の上に人ありて喚うて言はく汝一心正念にして直ちに來れ。・・・畏れざれ」とある。おそれざれ、何も怖がることはないという言葉がある。これは第一章の念仏は無碍の一道なりという言葉の意味の「悪をもおそるべからず」と。

というけれども今度は、「欲生我国」という言葉を、「我が国に生まれんと欲え」という言葉を概念化してはいけない。概念化して自力と考えてはいけない。自力を捨てて本願に帰するという意味なのだ、欲生とは。我が国に生まれようとするそれを概念化すると自力にしてしまふ。

その自力とは定善、散善の二心を言う。定善、散善の二心というのは先の『大無量壽經』の願で言えば第十九

と第二十の願がそれに当たっていますね。第二十願が定善で、第十九願が散善になっている。

その定善、散善をやるうとし、白道を進もうとすると群賊悪獣がやって来る。邪魔しに来る。そういう群賊悪獣などに惑わされても白道の上に立たされてくるものだから、そういう自力の心は一方出て来るけれども結局はその中におられない。

三、自力が駄目だと気が付いて初めて自分の足元に新たに白道を見いだす

この定善、散善の自力の心というのは非常に微妙な働きをするわけですね。両手使いになっているわけである。元々道を求めなかったならば定善、散善の心は勿論出て来ない。金儲けをしようなどというような方に、そういう自分の努力を往生の方に廻らそうという心は出て来ない。だが定善、散善そのものがある限り本願の道に乗せられておりながら、本願の声が本當に入って来ない。自分の体に入って来ない、定善、散善が邪魔しおる。俺はこれだけの善をしているのだ、俺はこれだけ良いことをしておるのだ、俺はこれだけ努力しているのだ、僕はこ

れほど真面目にやっているのだという事のほうが邪魔になつて、本願の声が響いて来ない。

四、すでに白道がある「現生不退」

来ないのだけれども、そこです、来いのだけれどももう既に一度志を立てて発願して、発心して白道の上に乗せられているお陰で、いつまでも定善、散善の世界に留まつておられなくなる。つまり定善、散善では駄目だ、自力では駄目だということに気が付いて来る。自力が駄目だと気が付いたときに、足元に何が出て来るか、そのとき初めて自分の足元に新たに白道を見いだす。

ここのは微妙な処でしょうね。もともと定善、散善という自力心がなければ白道などは勿論縁もゆかりもないことである。何だ白い道があるなら白い道があったでそれでいいじゃないか、ほっとけなどということなのだけれども、既に定善、散善でもやつて何とかあの世へ行きたい、向こうへ行きたいと思つているものだから、ところがそれが反つて邪魔をして、本願の声が聞こえて来ない。

聞こえて来ないがと言つて、しかしまたそこにずっとおられなくなる。それが有り難いところなのでしょう。

白道はいま初めて出来た白道ではない。昔から、旧からあつた白道であるが、今まで目に見えなかつた。古くからあつた白道だが、自分の心境がそういうふうに変つて来たときに足元に白道がはつきりと見えて来る。そうするともう白道が見えたのであるから、異端邪説、つまり異学、異見、別解、別行に惑わされなくなる。惑わされないということは一直線に行く。そこに弘願の信心を護つて戴ける。守護される。

自力を離れて自力が駄目だと気が付いたときに白道が出て来る。白道を発見する。発見した以上は後は一直線に行くよりしようがない。と言うことは裏か言つと仏の信心がこちらの身体に徹底して仏の方からその信心を他の異学、異見、別解、別行の惑わされないように護つて下さる。もうそうなれば、「悪をもおそれず」貪瞋二河恐れることなし、恐れるべからずと自（みずか）ら戒める。この自らでしようね、これは非常に力がある。外から護つて下さる。受け取る側から言つともうその道に來れば、その立場に來れば悪をも恐れぬ。いままでは貪瞋二河に攻められた。両方から攻めて來たのだが、恐れるべからずと自ら戒めて歩いて行ける。

ちようど初めは群賊悪獸が「歸つて来い。歸つて来い」

と、横のほうから「ヤー、ヤー」とこう言ったのが、それが消えてしまつて、自分自らの中から「そういうものは恐れるべからず」という、自分の中からそういう力が出て来る。

それから、これも『歎異抄』の第一章にあつた、「善も要にあらざ、念仏にまさるべき善なきゆへに」とありましたね。「善も要にあらざ」、自力雑善そういうものは要でない。要にあらざと自らを教える。第一章がそのままここに出て来る。

そういう自ら自戒自教の力、光、これが南無阿弥陀仏から湧いて来る。そういう力、光が南無阿弥陀仏から湧いて来る、これが「現生不退」であると言っている。

悪もおそれない、善も要にあらざというあの言葉ですが、現生不退というのは白道の上を歩いて行く人には、悪をおおそれず、善も要にあらざというそういう信心を守護されて行くから自分自らの心の中から、「悪をおおそれず」と自分自身を戒める、「善も要にあらざ」と自分に教えて行く。そういう力が南無阿弥陀仏から生まれて来る、それを現生不退というのだ。

五、「善悪はちゃんときまつたものである」

という宿業感に本当の自由がある

前に『歎異抄聴記』「宿業本能の問題」の章を全文プリントにして一緒にここで読ませてもらいましたね。それにちよつと返ってみたいと思うのですが。

あそこで読んだだけでどうも分からんものだから分からないかと思うところがあるので、一つ考えてもらいたい。

「善悪は宿業として与えられたものである。」  
という文章がありました。

ここで言っている善悪というのは、普通に世間で言う「倫理道德的の抽象的なものでない」。

つまりもっと具体的なものである。具体的なものというのは宿業としてのものである。

苦楽吉凶禍福、これは我々の日常生活の毎日繰り返している内容でしょうね、大なり小なり。日々の暮らして、あまりたいしたことがない限り平安無事だと言いますけれども、少し中に入ってみればいろいろな出来事がある。

自分の家には病人はなくてもすぐ親類の家には病人があるかもしれない。いや自分の家でも外から見たら至極平和なようだが受験する子供は日夜一人苦しんでいるかもしれない。また表は華やかに店を張っているようだけれども、裏は火の車で明日でも首をつろうと思っっている人もあるかもしれない。

そういう場合に直面して、こういう苦楽吉凶禍福というものを本当にじっくり自分のものとして見詰めてみたというか、見詰めると言ってもちよつと客観的過ぎるが、本当に自分の膚身のものとして掴んでみたことがあるかという、余りないのだね。

まあ普通は吉、福、善これを一つのグループにする。そうすると今度は凶、禍、悪これは一グループである。これはいいでしょうね。

その次です、

「善悪はちゃんときまつたものである」。

これは前に読んだのだけれども、そのまま読み通したと思う。この言葉はどういうように受けとれるか、いやどの程度に受けとれるか。

善悪は決まつたものだとすると何か宿命観ではないかということになる。我々の吉凶禍福はもうちゃんと決まつたものだという。それならそれはこっちもさっちも動きがとれないのではないか。そういう方から読んでみるとどうもそのところ納得できませんね。納得出来ませんか。

ところがこれを裏側からいうと多少分かるような気がする。裏側からはこのように書いてある。

「我々が人間の力で善を求めれば善を得、悪を厭うて捨てれば捨てられると、このように考えるとところに人間は迷信邪教に惑わされる。」

裏側の方から書かれてあると、大体これはそうだなと思わざるを得ませんね。

我々の力で善を求めれば善を得、悪を嫌い捨てれば悪を捨てられるというような、どっかそういうような感じがあるから、それでは一つ誰かに祈祷して貰って良い運が来るように、なんか祈ってもらってうんと儲けさせて貰おうかという気が出て来る。そこに迷信邪教が入って来る隙間がある。ちゃんと決まっているものだとこう表

から言うと、そのようなことは全然出来ないはずだ。

これだけではもうちよつと足りないかもしれない。もう少し書き直すというか、

「善悪は人間に一寸先も分からぬものであるが、それを分かるのだというように考えて勝手に善人でありすましてたりするから、」

これは皮肉な言葉ですが案外お互いにこれをやっているかも知れない。つまり、意識ないし無意識に、俺は賢いのだ善人だと思う。これは皆妄想なのである。そういう妄想に迷信邪教を生む余地と隙間が出て来る。こう言われると大分分かって来ますね。

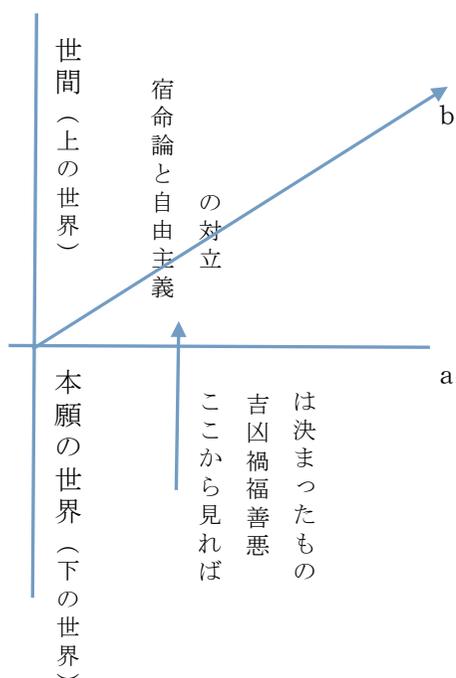
吉凶禍福はちゃんと決まったものだ和我々がこう普通に表から聞くと、これは耳慣れた方から言えばこれは宿命観にとれる。

自分の力で善を求めれば善を得、悪を嫌い捨てれば悪を捨てられると思う方は、一寸先は分からぬのに、自由自在に求めたら善は得られるのだ、いや善とはこうだと分かるというように考えて、勝手に善人でありすましている。こちらは悪い意味の自由主義ですかね。

先のほうはある意味の宿命論である。表から言えばそのなのである。

しかし、曾我先生が言われる、吉凶禍福はちゃんと決まったものだという意味は、これは宿命論と自由主義との奥の立場だろうと思うのですね。

つまり宿命論と自由主義はこの道（図表 線b）で出て来る。一方は自由だとするし一方は宿命だとする、どちらもこの立場で話をしている。ここでちゃんと決まったものだというのは、こういう争いをしていてることをこちら（線aの下の世界）から見ればちゃんと決まったものなのだ。



自分の力で善を求めたとしても善を得られるとか限らない。悪を避けようと思つて悪に陥つてゐる。人を千人殺さぬつもりでいても殺すこともある。一寸先も分からぬ。

一寸先も分からぬのならどうせ今日めちやくちややつても良いのではないかと、すぐそういう自由主義が出て来るが、それは上の世界のことである。下の世界を全然とらえておらない。そういうのを本願の世界から見ると、吉凶禍福苦樂は全部決まつたものである。

本願の世界に裏付けられた立場からいうと、我々の日常の吉凶禍福はちゃんと決まつたものだということしか出て来ない。

それならばそれは自由なのかというと、ちゃんと決まつてしまつてゐるから世間の立場の自由ではない。それなら宿命的な諦めかというところではない。

それがそうあるのだという通りに「ある」。あるように「ある」としか言いようがないが、決してそれは窮屈なものではない。極めてかえつて本当の自由がそこにある。

ちゃんと決まつたものだから、かえつて本当の自由がそこにあると言えるのではないか。

宿命論と自由主義との矛盾を同じ平面の立場で論じれば、これは妥協しようがない、調和のしようがない。

一步奥に入った、その奥に入ったところを、このa線を超えてという、この線を超える。この線を超えた世界から言うと、「吉凶禍福はちゃんと決まつたものだ」という言葉がでる。

これは無理な言い分ではないな。説明が下手だから何か無理なように聞こえるけれども。しかしその裏付けは、本願に裏付けられてゐるということ、これが大事なのである。つまりこの下の世界に生きるということがまず大事なのである。

前の問題に返るが「悪をもおさるべからず」、これは宿命論ではないですね。「善も要にあらず」これは自由な世界である。ただしそれには白道を通してということが問題なのだ。白道を通さないで上の世界だけで、つまり自力の立場で行こうとする限り宿命論になるか、得て勝手な自由論になるかのどちらかなのである。

これをもう一步下がつて上の世界で、上の世界の材料で考えてみると、例えば自然科学の世界であるということになれば、我々の背の高さから、身体つきから、人種から、知能から、何から何まで既にもうちゃんと決まつ

たものである。これは異議はないでしょうね。

この問題は、そういう自然科学的な上の世界の立場ではどこまでも自然科学的な話であって、それでは宗教の問題にならない。宗教の問題ということは生きている現実の場での安心の問題である。宿命論はあるいは論としてはあるいは成り立つかもしれないけれども、じゃあ宿命論で安心立命出来るかというとこれは出来ないですね。出来ないから無理に宿命論というものを立てる。

あるいは自由主義だと、自由主義で本当に安心立命出来るならこれは結構なのだが、現実には一寸先も分からぬ現実の事実がある。いつ道を歩いていてポーンと自動車に撥ねられるかも分からない、そんな時に「自由主義で・・・」などといくら振り回したところで全く空理空論である。

こういうものが向こうの（下の）世界からの光りに照らされてこの世を見ると、ちゃんと決まったもののだという事で納得出来る。それで本当に落ち着ける。決まったものだから金輪際狂いはない。安心が・・・（テープ中絶）

以上